超高強度コンクリートの実用化に関する研究

Study on Practical Application of High-strength Concrete

蓮尾 孝一 KOICHI HASUO

西本 好克 YOSHIKATSU NISHIMOTO

松田 拓 TAKU MATSUDA

建築技術部 小川 学 MANABU OGAWA

建築技術部 米倉 宏行 HIROYUKI YOMEKURA

Fc60~120N/mm²の超高強度コンクリートを対象とした実プラントによる実機試験および施工実験を行い,施工条件がフレッシュ性状や強度発現に与える影響に関して検討した。その結果,結合材水比 5.56 以上の領域では圧縮強度の増加が鈍くなること,コア強度 120N/mm²または積算温度(M0)1500D·D以上では,コア強度が標準養生強度を上回ることを把握した。

キーワード:高強度コンクリート,構造体コンクリート強度,施工性,シリカフューム

The authors conducted experiments on construction using Ready-Mixed Concrete, and discussed the effects of execution condition on workability and development of compressive strength for ultra-high-strength concrete. The main results are as follows:

- (1) In high binder-water ratio, development of compressive strength are decreased.
- (2) In some case, the strength concrete in structures is higher than the strength in standard curing.

Key Words: High-strength concrete, Strength of concrete in structures, Workability, Silica fume

1. はじめに

建物の高層化や結合材,混和材料に関する新しい材料の開発により、鉄筋コンクリートや鋼管コンクリート構造の建物を主として設計基準強度 (Fc) が60N/mm²級の高強度コンクリートが適用されている。これらの高強度コンクリートは JIS A 5308「レディーミクストコンクリート」規格外に相当するため、国土交通大臣の材料認定を取得し使用されている。これまでFc70N/mm²級までの高強度コンクリートについて、構造体コンクリート強度の調合設計手法を確立し、材料認定を取得して実施工を重ねてきた。

一方最近では、40階を越えるような高層 RC 建築が実用化されコンクリート強度も Fc100N/mm² やそれ以上の超高強度コンクリートへの要求が増している。これらの背景から、本論ではFc60~120N/mm² の超高強度コンクリートを対象とした実プラントによる実機試験および施工実験を行い、使用材料、調合、施工時期がフレッシュコンクリートの性状や強度発現に与える影響に関して検討した。

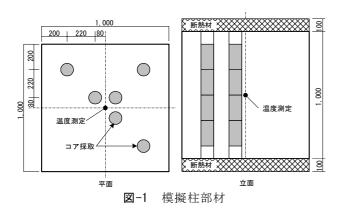
2. 実機練り試験

(1)目的

高強度コンクリートでは、構造体コンクリート強度と 標準養生強度との差を強度補正値(S値)として調合設 計に考慮している¹⁾。この強度差は高強度コンクリート では単位結合材量が多く, 水和発熱により部材が高温履 歴を経験するため生じると考えられている。S値は、結 合材の種類や水結合材比, 部材寸法, 施工時期等によっ て異なるため, 簡易断熱供試体や実際の部材を想定した モデル試験体からのコア供試体により構造体強度を確認 する必要がある。既報²⁾では普通ポルトランドセメント および高ビーライト系セメントを用いたFc70N/mm²まで の高強度コンクリートについて, 部材コンクリート最高 温度を推定し、これから強度補正値を求める方法を示し た。一方 Fc100N/mm² やそれ以上の超高強度コンクリー トでは、水和発熱の抑制や施工性の面からシリカフュー ムを添加したセメントが有効である。本論では、プレ ミックスタイプのシリカフュームセメントおよび高ビー ライト系セメントを用いたコンクリートをレディミクス

表 -1 使用材料

材料	種類	仕様	産地,他
細骨材	山砂	表乾密度:2.59(g/cm³) 吸水率:2.28% 粗粒率:2.60	千葉県市川市 万田野
粗骨材	硬質砂岩 砕石2005	表乾密度:2.71(g/cm³) 吸水率:0.56% 粗粒率:6.61	埼玉県秩父郡 両神
	高性能AE減水剤(H)	ポリカルボン酸系	JIS A 6204
混和剤	高性能AE減水剤 (TH1, TH2)	ポリカルボン酸系	New RC基準



トコンクリートプラント実機で製造し、フレッシュコン クリート性状とその経時変化、標準養生強度および構造 体コンクリート強度と構造体の温度履歴を把握した。

(2) 実験概要

本実験に使用した材料を表-1に、また結合材の品質を表-2に示す。シリカフュームセメント(SFC)は、製造工場で低熱ポルトランドセメントにシリカフューム(JIS A 6207適合品)を内割りで10%(質量比)混合したものである。また JIS R 5210 中の中庸熱ポルトランドセメント規格に適合する高ビーライト系セメント(HF)も用いた。化学混和剤は JIS A 6204 に適合する高性能 AE 減水剤(H)、および New RC 基準「高強度コンクリート用高性能 AE 減水剤の品質基準(案)」に適合する減水剤(TH-1,TH-2)を用いた。

コンクリートの調合を表-3に示す。 HF シリーズは $Fc60\sim80N/mm^2$ を想定して $W/B=24\sim32\%$ ($B/W=4.17\sim3.13$) ,単位水量 $165kg/m^3$ で3種類, SFCシリーズでは $Fc80\sim120N/mm^2$ を想定して $W/B=14\sim26\%$ ($B/W=7.14\sim3.85$) ,単位水量 $145\sim155kg/m^3$ で4種類の計7種類のコンクリートを製造した。目標スランプフローは, HF28,32 が 60cm ,その他のコンクリートは 65cm ,目標空気量は 2.0% である。

実験は季節要因を考慮して,夏期(8月),標準期(10月)および冬期(1月)の3回実施した。練混ぜは,強制二軸練りミキサ(容量 $5m^3$)を用いて,HF24,SFC18は $2m^3$ /バッチ× $2=4m^3$,その他は $3m^3$ /バッチ× $1=3m^3$ 製造した。練混ぜ時間(モルタル+コンクリート)はHF28,32で 60+90 秒,HF26,SFC26で 90+120 秒,

表-2 結合材の品質

結合材		牧	化学組成(%)				
		密度	比表面積	C ₃ S	C ₂ S	C ₃ A	C ₄ AF
		(g/cm^3)	(cm^2/g)	C_3S	C ₂ S	C ₃ A	C ₄ AI
セメント	高ビーライト系セメント(HF)	3.20	4100	34	47	3	8
ピメント	シリカフュームセメント(SFC)*	3.22	3500	32	48	4	9
混和材	シリカフューム	2. 23	160000	-	-	-	_

*:SFCの化学組成はベースセメントのものを示す。

表-3 コンクリートの調合

	結合材	w/D		c/.		単位量	랍(kg/m³)		Ì	昆和剤	
No.		W/B (%)	,	,	B/W	S/a (%)	水	結合材	細骨材	粗骨材	種類
HF24	HF	24	4.17	45.0	165	688	699	891	TH1	1.2~1.7	
HF28	HF	28	3.57	47.7	165	589	780	891	Н	1.1~1.5	
HF32	HF	32	3.13	48.7	165	516	811	891	Н	1.1~1.4	
SFC14	SFC	14	7.14	35. 0	145	1036	453	875	TH2	2.2~2.75	
SFC18	SFC	18	5. 56	43.5	145	806	645	875	TH2	1.8~2.4	
SFC22	SFC	22	4.55	46.8	150	682	738	875	TH1	1.7~2.2	
SFC26	SFC	26	3.85	48.7	155	596	795	875	TH1	1.6~1.9	

表-4 フレッシュコンクリート

		表一	! フ	V	ッシ	ュコ、	ンクリ	ート	
時期	NI.	時間	スラン	/プ° ブ	'p-	フロー時	間(sec)	空気量	コンクリー
吋朔	No	(min)		(cm)		50cm	停止	(%)	温度
		0	46.0	X	43.5	-	31. 7	1.6	33.0
	IID0.4	30	74. 0	X	73. 5	8.7	92. 3	1.3	33.0
	HF24	60	73. 5	X	74. 0	8.7	82. 3	1. 3	34.0
		90 120	66. 5 62. 5	×	67. 0 62. 0	11. 1 12. 6	102. 4 90. 1	1. 2	34. 0 34. 0
		0	59. 0	×	53. 0	8. 2	37. 7	0.9	30.0
	HF28	30	68. 5	X	66. 0	8. 1	58. 0	1. 3	32. 0
	unaa	0	51. 5	X	50. 5	5. 7	22. 4	1. 4	31.0
夏	HF32	30	67. 5	X	67. 0	6.0	42. 1	1.2	33.0
期	SFC14	0	61.0	Χ	60.0	22.0	116.6	3.4	34.0
791	01 014	30	65.0	Χ	62. 5	19.7	114.9	3.3	34.0
		0	73.0	X	73. 5	10.1	144. 5	2.5	32.0
	SFC18	30	73. 5	X	70. 5	8.3	87. 7	3.0	34.0
		60 90	72. 0 73. 0	×	73. 5	10. 4	129. 1 137. 7	2.8	34. 0
		0	58. 5	X	58. 0	15. 4	63. 9	1.6	33.0
	SFC22	30	65. 0	$\hat{\times}$	63. 5	13. 7	97. 4	2.8	33. 0
		0	55. 5	X	54. 0	13. 4	41. 2	2.8	32. 5
	SFC26	30	58. 5	X	57. 5	14. 8	72. 1	2.8	32. 5
		0	53.0	Χ	52. 0	10.3	26. 9	2.0	28.0
		30	69.0	X	67.0	6.5	62.3	2.3	28.0
	HF24	60	67.5	Χ	67.0	7. 2	72. 3	2.3	28. 5
		90	62.0	X	59. 5	9.5	54. 9	2. 2	28.0
		120	49.0	X	45. 0	-	21. 7	2.3	28. 5
	HF28	0	63. 0	×	61. 0	5. 9	29. 7	1.3	26.0
		30 75	70. 0 73. 0	X	68. 0 68. 5	5. 5 4. 8	51. 1 65. 7	1.3	27. 0 27. 0
		120	64. 0	×	63. 0	5. 5	38. 9	1. 5	26. 0
l-m²	HF32	0	58. 0	X	57. 5	5. 3	22. 8	0.8	26. 0
標進		30	64. 5	X	60. 0	5. 9	55. 6	1. 2	26. 0
期		120	63.0	X	60.5	5. 6	44. 1	1.1	26.0
朔	SFC14	0	65.0	Χ	63. 5	14. 5	87. 5	1.6	30.0
	SFC14	30	65. 5	X	65.0	13.6	144. 1	2.0	30.0
	SFC18	0	70.0	X	68.0	6. 1	84.6	1.5	27.0
		30	70.0	X	69. 0	7.0	109.3	1.7	28. 0
		60 90	70. 5 69. 0	×	70. 5 70. 0	10.2	94. 8 127. 3	1.6	28. 5 28. 0
		0	66. 0	×	66. 5	6. 7 5. 0	52. 5	1. 2 2. 8	28. 0
	SFC22	30	67. 0	X	64. 5	6. 2	75. 2	3. 2	27. 0
	anaaa	0	58. 5	X	58. 5	4.6	26. 0	3. 4	26.0
	SFC26	30	62. 5	X	59. 5	3. 7	33. 0	2. 5	26. 5
		0	72.0	X	70.5	5. 3	49.0	1.6	13.0
		30	70.5	X	68. 5	5. 2	72.6	1.6	13.0
	HF24	60	67.0	X	66. 5	6.5	46. 5	1.7	14.0
		90	65.0	Χ	63.0	7.0	43. 1	1.6	14.0
		120	56. 5	X	56. 0	8.6	38. 2	1.8	15.0
	HF28	0	60.0	X	58. 0	5.8	28. 0	1.6	12.0
		30	56. 0 66. 0	X	55. 0 66. 0	7.8 4.3	30. 7	2.0	13. 0 11. 5
	HF32	30	63. 0	×	61. 5	5.6	35. 2	1. 2 2. 0	12. 0
		0	66. 0	X	65. 0	16. 3	82. 4	1.8	18.0
by		30	71.0	X	71. 5	12. 5	170. 2	1. 7	17. 0
冬期	SFC14	60	70.0	X	68. 0	11. 3	178. 2	2. 0	18.0
州		90	68. 5	X	67.5	15.0	170.6	1. 9	18.0
		120	70.5	Χ	70.0	13.7	160.2	2. 1	16.0
		0	71.0	X	70.0	7.4	64. 7	1.6	14.0
	ana: :	30	72.0	X	73. 0	7. 5	80. 2	2. 1	15.0
	SFC18	60	73. 0	X	74. 0	5. 4	84. 3	1.8	14.5
		90	77. 5	×	75. 5	7. 1	110.4	1.7	15.0
		120	78.0	X	77. 0 62. 0	6. 0 7. 8	175.4	1.8	15.0
		0	64 0				58. 2	1.7	13.0
	SFC22	30	64. 0	X					
	SFC22 SFC26	0 30 0	64. 0 66. 0 66. 0	×	66. 0 65. 0	8. 2	71. 3 36. 1	1.9 2.7	15. 0 12. 0

SFC22 で 150+120 秒, SFC18 で 180+180 秒, SFC14 で 300+180 秒である。練混ぜ終了直後, および30分後にフレッシュコンクリート試験を実施した。

HF24,SFC18 は各季節共に、練混ぜ後90~120分までフレッシュコンクリートの経時変化を確認した。

構造体コンクリートの温度および圧縮強度は、図 -1に示す模擬柱部材を作製し確認した。模擬柱部材には実際の柱部材の熱的条件を考慮し、部材上下面からの放熱を防ぐため断熱材(厚さ100mm)を取り付けている。部材温度は、試験体中心に設けた熱電対により測定した。圧縮試験用のコア供試体は、図 -1中に示す様に材齢 28,56,91 日において中心側と外側から各1本ずつ採取した。

(3) 実験結果

a)フレッシュコンクリートの性状

実機試験でのフレッシュコンクリート試験結果を表-4に示す。またスランプフローの経時変化の例を図-2に示す。SFC18では各季節共にスランプフローの変化は小さくほぼ安定していた。一方 HF24 は冬期実験では、時間経過と共に徐々にスランプフローが小さくなった。夏期、標準期では、最初の30分で急激にスランプフローが大きくなりその後は冬期と同様に徐々にスランプフローが小さくなった。空気量に関しては図-3に示す様に、いずれのコンクリートにおいても経時変化は小さく安定していた。

b) 部材コンクリート温度

擬柱部材の中心温度を表-5に示す。最高温度の到達時間は,SFCシリーズでは打設後19~21時間(夏期),15~18時間(標準期),25~29時間(冬期)である。HF シリーズではそれぞれ17~21時間,18~23時間,26~32時間である。また温度履歴の一例(夏期)を図-4に示す。SFC14,18,22 では初期に部材温度の停滞が見られるが,これは混和剤の添加率が 2.2% 以上と多く水和反応が遅延した影響と考えられる。次に部材の最高温度を推定するため,図-5に模擬柱に打設したコンクリートの打設時温度と単位温度上昇率(Δ T)の関係を示す 2)。 Δ Tは式(1)より算定した。ただしSFCシリーズは結合材中のベースセメントの単位量で求めた。

$$\Delta T = \frac{\left(T_{\text{max}} - t\right)}{\left(C/100\right) \cdot \sqrt{A}} \tag{1}$$

T_{max} : コンクリート最高温度 (℃) t : コンクリート打設温度 (℃) C : 単位セメント量 (kg/m³) A : 模擬柱断面積 (m²)

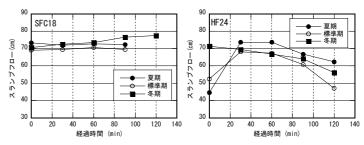


図-2 スランプフローの経時変化

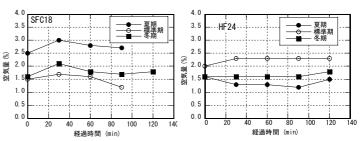


図-3 空気量の経時変化



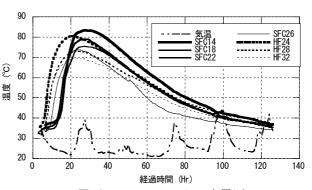


図-4 コンクリート温度履歴

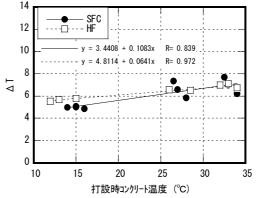


図-5 打設時温度と温度上昇の関係

この図から、打設時コンクリート温度が高くなるに従って温度上昇率もやや増加する傾向がみられる。既報 2)では L(低熱セメント)は Δ T $\stackrel{.}{=}$ 5.6 , HF は Δ T $\stackrel{.}{=}$ 6.8(at20 $^{\circ}$ C)であり、今回の実験では低熱セメントをベースとしている SFC は既報とほぼ同じである。一方 HF では,既報と比較して本実験での単位温度上昇率は小さい。本実験では単位結合材量が多いため,同一結合材量当りの温度上昇が小さくなったものと考えられる 3 0。

c)強度性状、ヤング係数

標準養生供試体の圧縮強度とヤング係数,およびコア供試体の圧縮強度を表-6に示す。また図-6に結合材水比と標準養生強度の関係を示す。SFCシリーズでは結合材水比5.56までは、結合材水比と圧縮強度は直線関係にあるが、それ以上の高結合材水比の領域では、圧縮強度の増加が鈍くなる。これは練混ぜ性の低下や粗骨材強度による限界が原因と考えられるが、詳しくは今後の課題である。HFシリーズは、今回の実験範囲においては結合材水比と圧縮強度は概ね直線関係にある。また標準養生供試体の圧縮強度は図-7に示す様に、どの結合材においても練り上がり時のコンクリート温度、すなわち製造時期に関わらず同一調合ではほぼ一定であった。

次に構造体コンクリート強度について検討する。 図-8に模擬柱試験体から採取した材齢91日のコア強度と式(2)で求めた圧縮強度比の関係を示す。

$$_{28}S'_{n} = F_{cn}/F_{s28}$$
 (2)

F_{S28} : 標準養生供試体材齢28日の圧縮強度(N/mm²) F_{cn} : コア供試体材齢 n 日の圧縮強度(N/mm²) (n=28, 56, 91)

SFC シリーズでは、コア強度が大きくなるに従い、圧縮強度比が大きくなる傾向にある。材齢91日コア強度が $120 N/mm^2$ 以上の範囲では、圧縮強度比 $({}_{28}S'_{91})$ が 1.0 以上となり材齢91日コア強度が材齢 28日標準養生強度を上回っている。

一方 HF シリーズではコア強度と圧縮強度比との 関連は見られないが、実験時期が要因と考えられる 圧縮強度比の相違が確認できる。そこで、模擬柱部 材の積算温度 (M0) と圧縮強度比の関係を求めた。 その結果を図-9に示す。ここで M0 とは、0 $^{\circ}$ を基 準とした積算温度である 4 。 ややばらつきがあるも のの、部材の積算温度が 1500D・D以上の範囲で圧

表-6 圧縮強度・ヤング係数

 (N/mm^2)

				Э	E縮強原	度			ヤング係数
コ)	ノクリート		標準	養生			コア		標準養生
材齢		7日	28日	56日	91日	28日	56日	91日	28日
	HF24	85.0	118	125	127	128	131	132	45200
	HF28	72.3	107	117	123	111	118	120	42900
百	HF32	64. 9	92.8	105	116	95. 9	104	105	40700
夏期	SFC14	105	125	137	143	146	159	156	49100
791	SFC18	94. 1	126	129	138	126	131	134	48600
	SFC22	86. 9	114	125	131	122	128	126	47400
	SFC26	74.0	103	111	121	90.6	96.0	99.3	44300
	HF24	75. 3	117	122	128	107	107	108	_
	HF28	66. 1	103	116	122	93.9	101	101	_
標	HF32	55. 1	92. 5	104	108	80.9	85.3	88. 5	-
準	SFC14	106	136	140	145	152	151	155	_
期	SFC18	96.6	135	136	143	134	135	136	_
	SFC22	75. 5	112	119	125	110	110	110	_
	SFC26	65.0	105	113	119	89.8	92.6	94. 4	_
	HF24	76.0	117	127	128	100	109	118	-
	HF28	62.4	115	110	115	85.8	95.5	106	-
冬	HF32	54. 1	102	102	104	75. 1	83.3	97. 9	-
期	SFC14	112	140	148	158	149	148	153	-
791	SFC18	89.7	125	142	144	125	116	138	_
	SFC22	72.8	118	120	127	97.0	102	115	_
	SFC26	57.8	103	106	117	81.4	89. 1	105	_

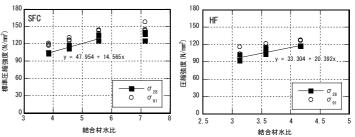


図-6 結合材水比と圧縮強度の関係

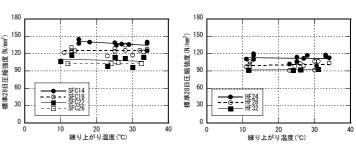


図-7 練り上がり温度と圧縮強度の関係

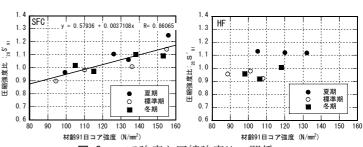


図-8 コア強度と圧縮強度比の関係

縮強度比が 1.0 以上となりコア強度が材齢28日標準養生強度を上回ることがわかる。次にコア採取位置と構造体強度の関係について検討した。図 -10 は,模擬柱部材の内側から採取したコアと外側から採取したコアの材齢91日強度の比較を示している。 HF シリーズの 100N/mm²以上の範囲で僅かに内側コア強度が大きい傾向が見られる。これは内側コア位置での部材温度は外側コア位置での温度より高く,積算温度が大きくなった影響と考えられる。

ヤング係数について実測値と,式(3)で示したNewRC 式を用いた計算値と比較した結果を図-11に示す。

 $E = 33500 \times k_1 \times k_2 \times (\gamma/2.4)^2 \times (\sigma_R/60)^{1/3} \quad (3)$

E : ヤング係数 (N/mm²)

k₁ : 粗骨材の種類により定まる補正係数

(硬質砂岩1.0)

k₂:混和材の種類により定まる補正係数

(SFCは0.95, HFは1.0)

γ : 単位容積質量 (ton/m³)

σ_R : コンクリート圧縮強度 (N/mm²)

今回用いた材料では、実測値が NewRC 式の計算値と 比較してSFCシリーズで約 $11\sim18\%$ 、 HF シリーズで約 $2\sim6\%$ 大きい値となった。

3. 施工実験

(1)目的および実験概要

実機試験の結果を踏まえ、120N/mm²級の高強度コンクリートについてプラント実機での製造、現場までの輸送、および実建物と同じ柱の試験体への打設による施工実験を行った。実験は標準期(4月)に実施した。使用したコンクリートは表-3中のSFC18と同じである。また使用材料、練混ぜミキサ、練混ぜ時間も実機練り試験と同一条件である。練混ぜ量は2.25m³/バッチ×2=4.5m³である。コンクリートを製造後アジテータにより約30分輸送し、荷卸時点でフレッシュコンクリートの性状を確認した。

本コンクリートによる柱部材への施工性を把握するために、図 -12 に示す実柱試験体を打設した。試験体は施工予定の実建物の柱と同一形状および配筋である。打ち込みはバケット(容量 $4m^3$)を用い、打設中はバイブレーターが常時コンクリート天端より 30cm 程貫入した状態を保持しながら、連続的に打設した。

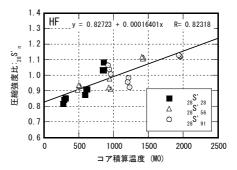


図-9 積算温度と圧縮強度比の関係

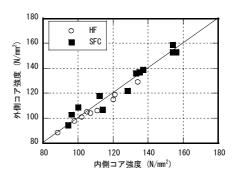


図-10 コア強度比較

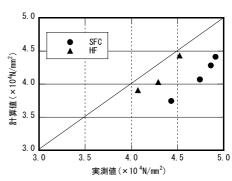


図-11 ヤング係数の比較

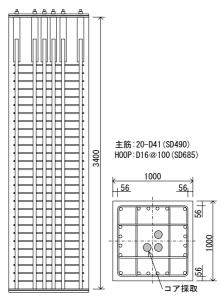


図 -12 柱部材

(2) 実験結果

施工実験における練混ぜ直後,および荷卸(37分後)でのフレッシュコンクリートの試験結果を表-7に示す。荷卸ではスランプフローが5cm低下したが,コンクリートはワーカブルな状態であった。実柱試験体は脱型後の目視確認でもジャンカ等の欠陥は無く良好な状態であった。

表-8に圧縮強度を示す。標準養生強度およびコア強度は標準期の実機練り試験と同等であった。また材齢91日コア強度は135N/mm²であり、Fc120 N/mm²に対して十分安全な強度である。次に図-13、14に柱試験体の高さ方向のコア強度および単位容積質量の分布を示す。高さによるコア強度、単位容積質量の違いは認められない。また材齢91日コア強度の変動係数は0.26%と小さく、部材中のコンクリートは均一な状態であった。

4. まとめ

 $Fc60 \sim 120 N/mm^2$ の高強度コンクリートの実機練り試験 および施工実験を行い以下の知見を得た。

- ① SFC18は、ワーカビリティが安定していたが、 HF24 では、一部大きなスランプフローの変動があった。
- ② SFC シリーズでは結合材水比 5.56 までは、結合材水比 と圧縮強度は直線関係にあるが、それ以上の高結合材 水比の領域では、圧縮強度の増加が鈍くなる。
- ③標準養生供試体の圧縮強度は,製造時期に関わらず同一調合ではほぼ一定である。
- ④ SFC シリーズは、コア強度が大きくなるに従い圧縮強度比が大きくなる傾向にあり、材齢91日コア強度が120N/mm² 以上の範囲では、材齢91日コア強度が材齢28日標準養生強度を上回る。 HF シリーズは積算温度(M0)が1500D・D以上の範囲でコア強度が材齢28日標準養生強度を上回る。
- ⑤施工実験における圧縮強度は、標準期の実機練り試験の圧縮強度と同等であり、柱内部の高さによるコア強度、単位容積質量の違いは認められない。また材齢91日コア強度の変動係数は0.26%と小さく、柱内のコンクリートは均一な状態である。

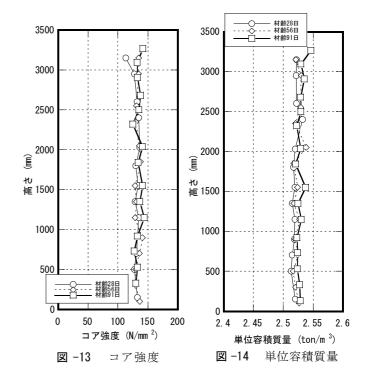
謝辞:本研究を行うに当たり、コンクリートの製造で御協力いただきました晴海小野田レミコン㈱、花王㈱の関係諸氏に感謝の意を表します。

表-7 フレッシュコンクリート

ĺ	時間	スランプ。フロー	フロー	時間	空気量	コンクリート
l	(min)	(cm)	50cm	停止	(%)	温度(℃)
ĺ	0	68.0×67.0	10.2	84.8	1.8	21.0
	37	63.0×62.0	11.3	96. 9	1.8	22. 0

表-8 圧縮強度

(N/mm ²)									
羊	材齢								
養生	7日	28日	56日	91日					
標準	95.0	134	144	150					
コア	-	129	133	135					



参考文献

- 1)日本建築学会:建築工事標準仕様書・同解説(JASS 5 鉄筋コンクリート工事),2003
- 2) 蓮尾孝一,加納嘉:高強度コンクリートの強度発現に 関する実験的研究,日本建築学会大会学術講演梗概 集,pp801-804,1998
- 3) 渡邉聡: 超高強度コンクリートの強度発現に関する研究, 松村組技術研究所年報, VOL. 9, pp51-58, 2001
- 4)河上浩司,菅谷泰之,西本好克:超高強度コンクリートの強度発現に関する実験的研究(その1.温度条件と強度発現の評価),日本建築学会大会学術講演梗概集,pp1057-1058,2002